
今時のモラトリウム世代と情報メディア

——青少年の意識調査分析を軸に——

米 田 公 則

1. はじめに

本論文は、1997年から98年にかけて「東海ニューメディア懇談会・電波利用高度化研究部会（部会長：吉田昭二愛知工業大学教授）」（現在は名称が「東海情報通信懇談会」（注1）と変更された）が行った「移動体通信の利用に関するアンケート」において、筆者が担当した「今時のモラトリウム世代」を加筆・修正したものである。この調査の詳しい分析は当部会から『モバイルコミュニケーションの世界から……未来へのまなざし—移動体通信の調査・分析』として公表されている。ここでは、調査の概略だけふれることにする。

調査の対象とした大学及び高校は愛知工業大学、中京大学、椙山女学園大学及び愛知県内の高等学校3校である。アンケート対象者を大学生1200人、高校生1200人とし、回収率は約82パーセントであった。

性別では男性44.1%、女性55.9%、大学生が65%、高校生35%と偏りがあり、アンケート調査方法としてはサンプル抽出の方法においても厳密さに欠ける点は否定できない。

しかしながら、本調査において「今時のモラトリウム世代」のモバイルコミュニケーションの実体と生活をうかがい知ることができる興味深い調査結果となっている。

2. 「今時のモラトリウム世代」の意味

本論文は、「いまどきのモラトリウム世代」の実態を今回の調査から解明することを目的としている。それでは、「モラトリウム世代」とは何なのだろうか。本来「モラトリウム」とは「役割猶予」ともいわれるものであり、精神分析学者エリクソンが青年期を特徴づけるのにこの用語を転用し、「心理＝社会的モラトリウム」と定義を行った。これは、いわば児童期から成人期の間の中間段階、すなわち青年期が秩序への参与のための試行錯誤を試みる時期としてとらえられたものである。

しかしながら、このような青年期はいつの時代にも存在したものではなく、近代化の産物であり、いわば「青年期の誕生」とでもいうべき時代があった。この誕生の時期は一般に1870年代から世紀末にかけての時期である。この時代は、資本主義が進展し、国民国家が成熟期を迎えるにともない、公的あるいは私的な教育機関が設置されたり、あるいは教育期間の延長が行われ、中産階級を中心にいわゆる「青年学生」が登場した時代であり、これ以降教育を受ける層が徐々に労働者層にまで拡大し、一般化した時期であった。

このような青年期の誕生により、一方で青年は成人と同様の労働を行うことなく、社会的強制から保護・解放された時期をおくことができるようになった。しかし、他方でこの時期は、エリクソンがいうように教育を通じて、社会に対する同

調を強いられる時期でもあり、「強制」の時期である。このような二面性を持ちながら、まさに「猶予」の時代として青年期があるのである。エリクソンは、これを社会が提供したものとして「制度化された心理・社会的猶予期間」(注2)ととらえている。

しかしながら、青年期は決して安定したものではなく、「同一性(アイデンティティ)の拡散と葛藤が頂点に達する年代」(注3)である。エリクソンは様々な臨床例を上げ、青年期のアイデンティティの拡散という病理を提示している。もちろん、この背景にはアメリカ社会の民族的複雑さなどの社会的問題があることはいうまでもない。つまり、青年期とはエリクソンの理解では危機の年代であり、「正常な発達の危機」(注4)なのである。

ところが、日本においては、モラトリアムの年代は、危機という捉え方ではなく、「青年が自由に、いろいろな社会的な思想、価値観に同一化して、それを遊び、それを実験することが許される」(注5)いわば自由な年代と理解された。

さらに、小此木啓吾はテクノロジーの進歩、社会変動の加速化、価値観の変化の激しさにより「青年世代を越えて、各世代の人々がすべてモラトリアム状態におかれること」ことになり、「遊び人間化してゆく」ととらえ、このような時代を「モラトリアム時代」ととらえる(注6)。

これは井上俊が現代青年の意識と行動様式の特徴の一つとしてとらえた「遊戯性」の延長線上にあるものである(注7)。

少々古く、また調査対象年齢も異なる調査報告であるが、NHKの「今、小学生の世界は」と題した調査において「早く大人になりたい」と答えた子供が3割にみえず、「そうは思わない」と回答した子供が7割にも及んだという報告がなされている。このことから、大人として積極的に自立しようとしないうモラトリアム世代の特質を理解することができよう。

しかしながら、モラトリアムの時期がいつの時

代も同じというわけではない。現代におけるモラトリアム世代はこれまでとは違った独自の特徴を持っている。第1の特色は、今日のモラトリアム世代がそれまでの世代とは違って、これまでにないメディア環境、メディア文化を所与のものとして受け入れ、その中で生活をしてきたという点である。その第一は、テレビに代表される情報メディアが生まれながらにあった世代であるという点である。このことは当然そのようなメディアに対する依存度を高めることとなる。これは、「あなたは普段、主にどのような方法で情報を得ていますか」という設問に対し、7割以上のものが「テレビ、ラジオ」と回答し、新聞と回答したものがわずか、9割にすぎないことから分かる(グラフ1)。さらに、「あなたが生活する上で、なくてはならないと感じるもの」として、55%のものが「テレビ、ビデオ」と回答していることから、テレビに代表されるメディア環境の中で生活していることが分かる(グラフ2)。まさに現代のモラトリアム世代は「テレビ世代」なのである。

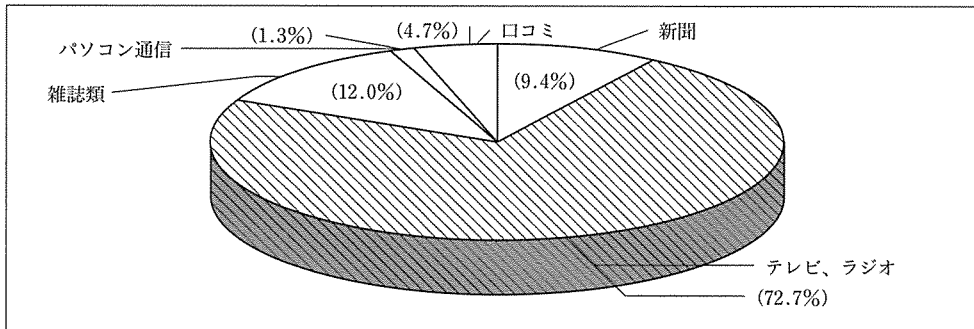
第二の点は、電話に代表されるコミュニケーション・メディアが社会全般に普及し、その利用の質と量の両面においてそれまでの世代とは異なる積極的な利用がなされるようになったことである。今日の携帯電話、PHSなどの普及はコミュニケーション・メディアの利用頻度を高めるとともに利用形態をより個人化させた。このようなメディアは常に流行の先端をいき、それを形成する若者層から普及し始める。このような普及は、当然電話メディアの利用形態において質的な変化をもたらす。つまり、電話を単なる連絡の手段としてのメディア、つまりインストルメンタルなメディアとして利用するのではなく、日常生活で友人と喫茶店などで歓談するのと同じように、コミュニケーションの手段としてメディアを利用する。これは、電話メディアのコンサマトリーな利用ということができよう。

これは「あなたは、一日にどのくらい電話を利

グラフ 1

あなたは普段、主にどのような方法で情報を得ていますか。以下の中から一つだけ選んで下さい。

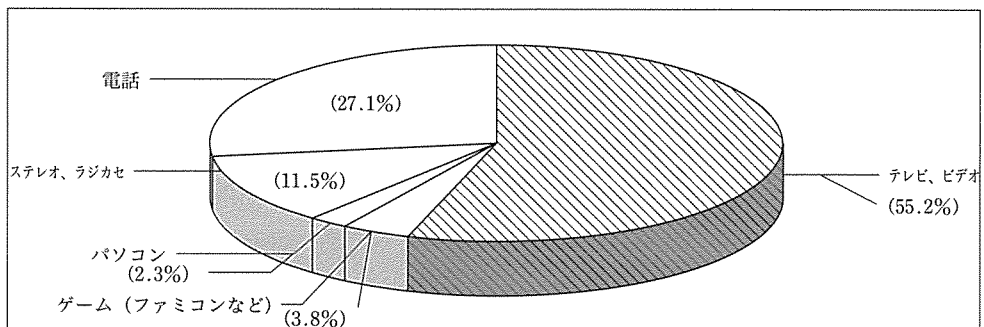
①新聞	187 人
②テレビ、ラジオ	1,452 人
③雑誌類	239 人
④パソコン通信（インターネットなど）	25 人
⑤口コミ（うわさ話など）	93 人



グラフ 2

あなたが生活する上で、無くてはならないと感じるものを、以下の中から一つだけ選ぶとすれば、何を選びますか。

①テレビ、ビデオ	1,074 人
②ゲーム（ファミコンなど）	74 人
③パソコン	45 人
④ステレオ、ラジカセ	224 人
⑤電話	527 人



用しますか」という回答に対して、毎日30分以上と回答したものが30 歳以上に上り(グラフ3)、「あなたが今までにした長電話の最長記録はどのくらいですか」という回答に対しても平均して2時間から3時間、中には5時間以上も電話をしたことがあると回答していることも、このことがうかがえる。

第二の特色は、モラトリウム世代に限らないことであるが、現代人の生活が私化(プライバタイズーション)ないしは、個人化しているという点である。つまり、現代人が居、食、住のあらゆる生活領域において個人化が進行していることである。

このことは、別の角度から見ると現代人がそれだけ物質的な「豊かさ」を享受していることとらえることもできよう。物質的な「豊かさ」は個人の生活における自由度を拡大させるが、その裏返しとして個人相互の結びつきを希薄化させることになる。同じ家族でありながら、それぞれの部屋で自分の好きな番組を自分のテレビで見るとい

うことが日常になっているが、実は見ている番組が同じであったという冗談のような話しはかなりリアルな家族の像であろう。

このことは大学生、高校生の居住形態の質問に対する回答からうかがえる。「あなたの居住形態を教えてください」という設問に対し、「アパート、マンション」という回答が23 歳、自分の部屋のある自宅生が71 歳で、自分の部屋のないものは、わずか4 歳にすぎない(グラフ4)。

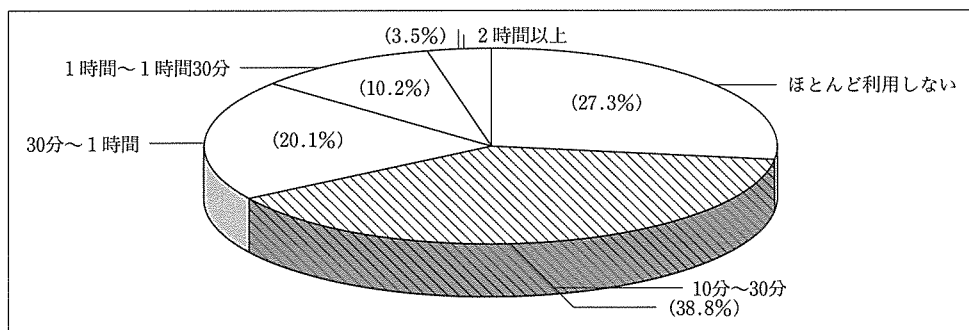
また、パーソナルなコミュニケーションの手段である移動体通信機器の利用状況を見ても過半数のものが所有しており、メディアによるコミュニケーションも個人化していることがうかがえる。

個人化の状況は生活のリズムにも現れる。「あなたの就寝時刻は、いつも何時頃ですか」という設問に対して、12 時以前に就寝しているものは27 歳にすぎず、残りのものは12 時以降の就寝であり、午前1 時以降の就寝が35 歳もある。このような生活のリズムは親とかなりのギャップがあることが当然予想され、家族とは別に学生が長い夜を

グラフ3

あなたは、一日にどのくらい電話(携帯電話、一般加入電話、パソコン通信、通話など種類・内容を問わず)を利用しますか。

①ほとんど利用しない	531 人
②10 分～30 分	754 人
③30 分～1 時間	390 人
④1 時間～1 時間30 分	199 人
⑤2 時間以上	68 人



過ごしていることが分かる（グラフ 5）。

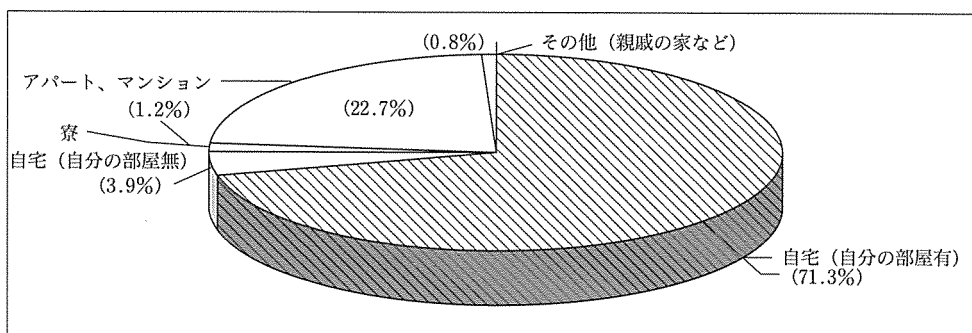
このことからほとんどの学生は自分のプライベートな空間を持ち、自分の生活のリズムの中で

ポップスなどの好きな音楽を聴いたりしながら、過ごしていることと想像される。

グラフ 4

あなたの居住形態を教えてください。

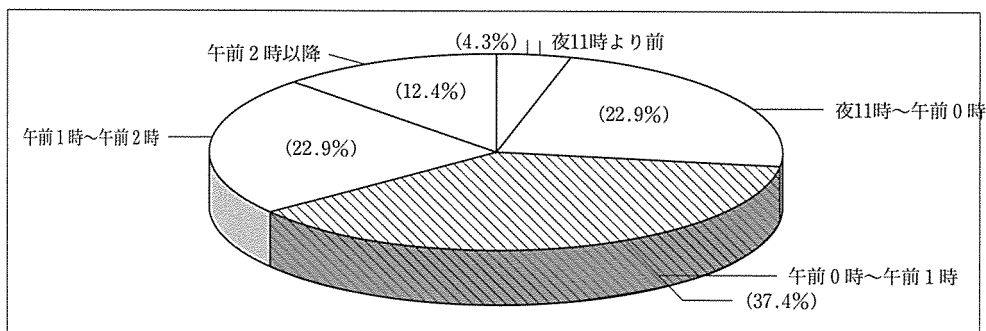
①自宅（自分の部屋有）	1,378 人
②自宅（自分の部屋無）	75 人
③寮	24 人
④アパート、マンション	439 人
⑤その他（親戚の家など）	16 人



グラフ 5

あなたの就寝時刻は、いつも何時頃ですか。

①夜 11 時より前	83 人
②夜 11 時～午前 0 時	443 人
③午前 0 時～午前 1 時	723 人
④午前 1 時～午前 2 時	443 人
⑤午前 2 時以降	239 人



3. モラトリウム世代とメディア

それでは、もう少し詳細にこれらの特色を見ていこう。はじめに、メディア環境、メディア文化に対する若者の意識をコミュニケーションという視点を取り入れて見ていこう。

「あなたが生活する上で、なくてはならないと感じるもの」という問いは、いわば高校生、大学生のそれぞれのメディアに対する依存度を表すものである。先に見たように、情報源の質問と併せて考えると、現代の若者がまず第一にテレビやラジオを情報源とし、また同時にそれらをなくてはならないものとして位置づけ（55 ㊦）、次に電話（27 ㊦）、ステレオ（12 ㊦）、ゲーム（4 ㊦）、パソコン（2 ㊦）の順番であることが分かり、テレビを中心としたメディア環境の中で生活していることがうかがえる。

これらのメディア依存度を性別で見ると、注目される点は電話の依存度（なくてはならない度）が、女性では、3 割以上であるのに対して、男性では 2 割程度であり、女性の方が高いことが分かる。

その他、男性の方でゲームをなくてはならないものと位置づけたものが多いことが注目されよう

（グラフ 6）。

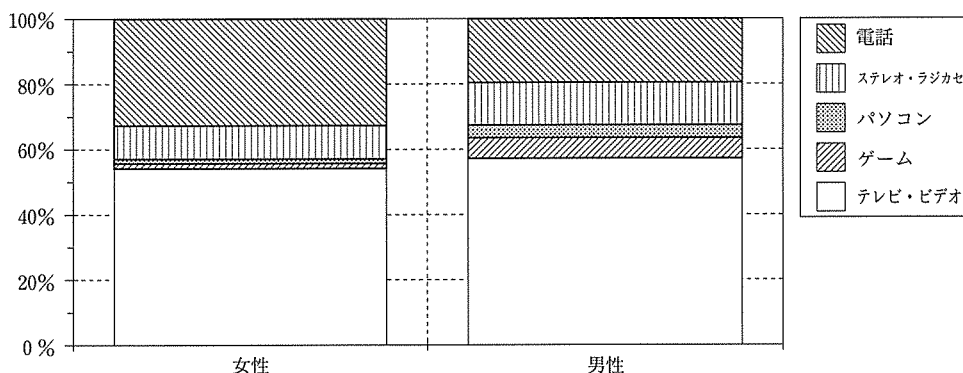
さらに、メディア依存度を学校の種類別で見ると、理系の大学生と理系志望の高校生、文系の大学生と文系の高校生がほとんど同じ傾向を示し、理系の学生よりも文系の学生の方が電話をなくてはならないメディアと考えていることが分かる（グラフ 7）。

それでは、テレビやラジオ、ステレオなどのメディア環境でどのような音楽を聴いているのであろうか。「あなたの好きな音楽ジャンルは何ですか」という設問に対して、圧倒的にポップス系（69 ㊦）が多く、ついでロック系の 20 ㊦となっている（グラフ 8）。

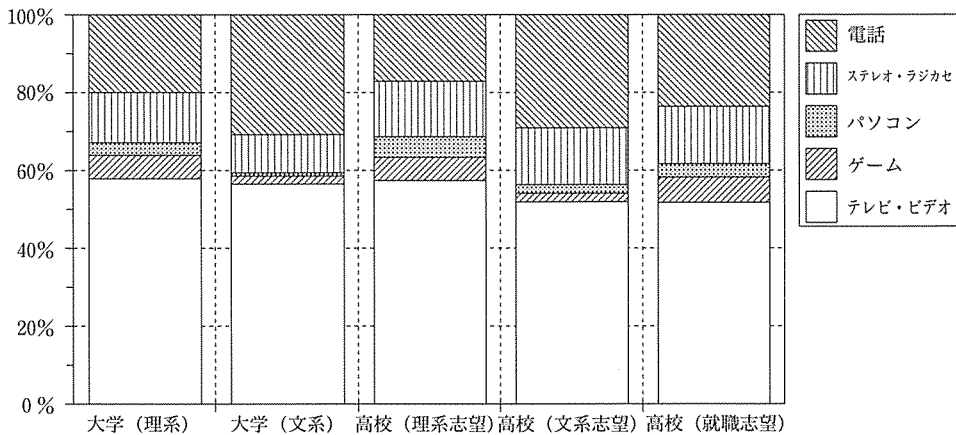
しかし、このことは必ずしも、若者が自分の居住空間をメディア空間としてそのカプセルの中で生活をしているということを意味しない。先ほど述べた現代人の個人化は、必ずしも孤立化と意味するものではない。「なくてはならないもの」という設問においてもテレビ、ビデオの 55 ㊦に次いで多いのが電話の 27 ㊦であった。電話は選択肢のメディアの中でコミュニケーション・メディアという性格を持つ。つまり、メディアを通じて他の者とコミュニケーションをとり、何らかの結びつきを持つ手段なのである。

これに対し、もっともコミュニケーションから遠いものがゲームである。ゲームはいわば、個人

グラフ 6 性別のメディア依存度



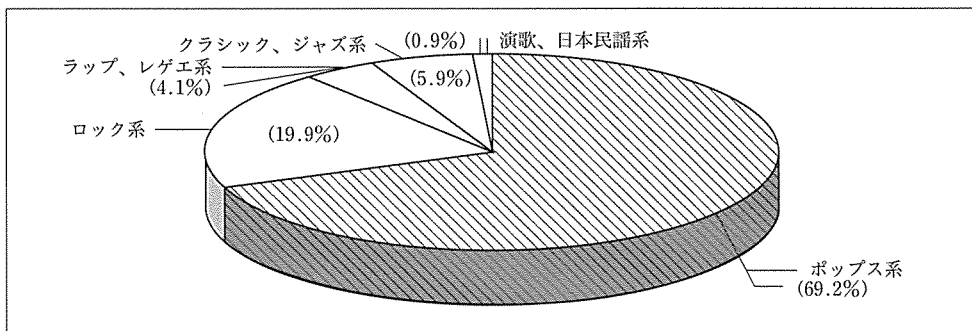
グラフ7 学校とメディア依存度



グラフ8

あなたの好きな音楽ジャンルは何ですか。

- | | |
|-------------|---------|
| ①ポップス系 | 1,370 人 |
| ②ロック系 | 395 人 |
| ③ラップ、レゲエ系 | 81 人 |
| ④クラシック、ジャズ系 | 117 人 |
| ⑤演歌、日本民謡系 | 18 人 |



がゲームの世界に入り込むことにより成立する世界であり、仮想の世界である。このようなメディアを「なくてはならないもの」と感じているものが4割にすぎない。

次に、コミュニケーション・メディアの利用を特に移動体通信の利用者に限って見る。「あなたは、主にどんな時に移動体通信機器を利用してい

ますか」という問いに対し、「友達との会話」と回答したものが59名であり、ついで「彼氏、彼女との会話」と答えたものが23名になっている。このように携帯電話に代表される移動体通信が友人との会話に利用されており、手段の利用である「アルバイト先や親への連絡」と回答したものが12名にすぎないことから、電話がコミュニケーション

ンの手段として、多くの若者になくはないものとなっていることが分かる（グラフ9）。

また、このことは移動体通信機器の特色とも深く関わっているものと考えられる。携帯電話に代表される移動体通信機器は基本的に個人所有のものであり、同時にその移動性からどこでも利用することが可能であり、個人的なコミュニケーションの手段としてほとんど何の制約もなく自由に利用することができ、一般電話などに比べ、より個人的なメディアである。

このことは、大学生、高校生別の移動体通信の利用実態から見ても興味深い。「あなたの通信手段は何ですか」という問いに対して、総数では何らかの移動体通信機器を手段として利用しているものが52 歳にとどまっている。しかし、大学生では6 割前後のものが何らかの移動体通信機器を利用しているのに対して、高校生では5 割弱の利用である。（ただし、就職希望の高校生は大学生と同程度の所有比率である）（グラフ10）。

また、現在移動体通信機器を持っていないものに対する「あなたは今後、移動体通信機器を持ちたいですか」という問いに対して「経済的余裕があれば持ちたい」と回答したものが46 歳に上っており、持ちたくないと回答したものはわずか16 歳である（全体の8 歳程度）。これらのことから個人的なコミュニケーションの手段として携帯電話などの移動体通信機器に対する期待度が所有状況よりかなり大きいことが分かる（グラフ11）。

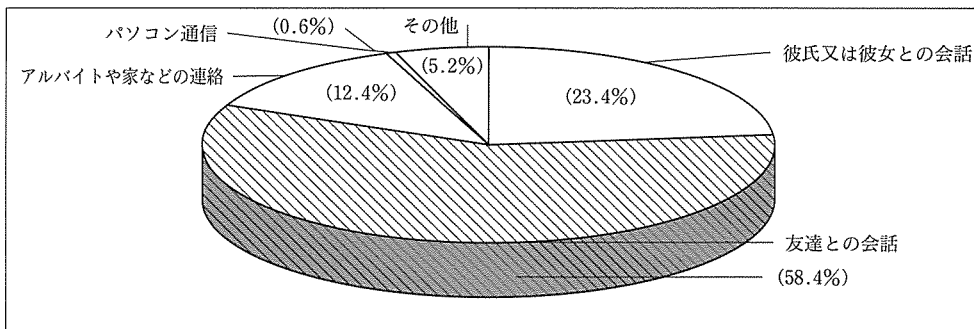
またさらに、「あなたは、移動体通信機器の電話番号を、まず最初に誰に教えましたか」という設問に対しても、「親しい友達」63 歳、「異性の友人」12 歳と友人関係で75 歳を占め、「両親」の21 歳を大きく引き離している（グラフ12）。

これらのことから携帯電話などが個人的なコミュニケーションの手段として積極的に受け入れられ、利用されていることが分かる。

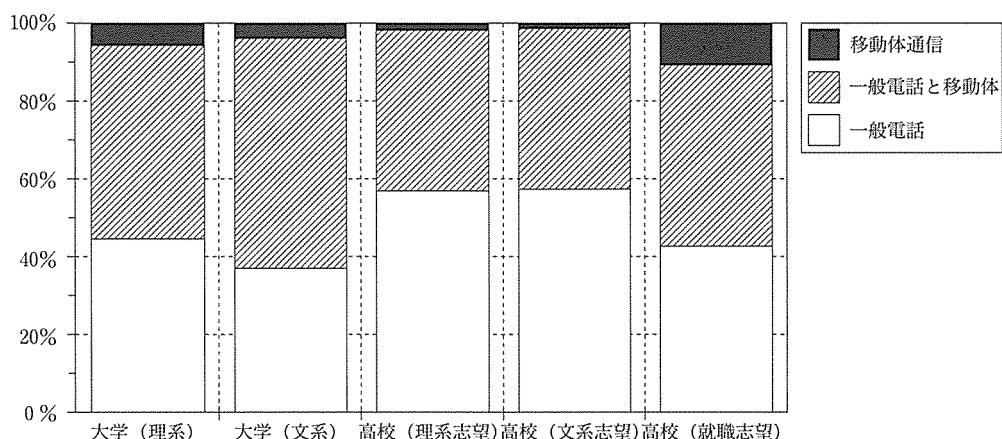
グラフ9

あなたは、主にどんな時に移動体通信機器を利用していますか。以下の中から一つだけ選んで下さい。

①彼氏又は彼女との会話	322 人
②友達との会話	804 人
③アルバイト先や家などの連絡	171 人
④パソコン通信	8 人
⑤その他	71 人



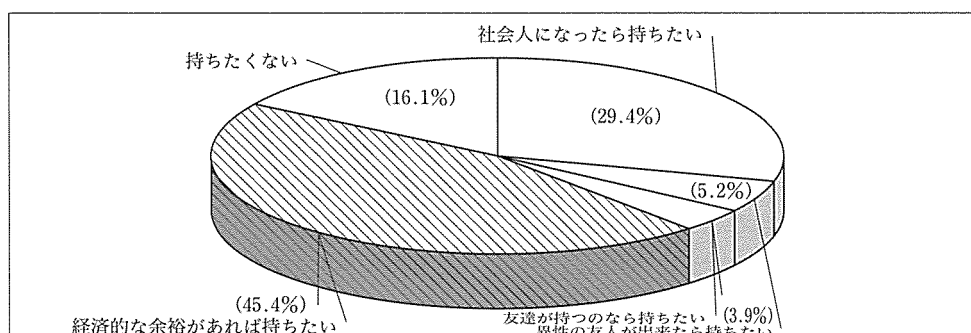
グラフ 10 学校の種類と通信手段



グラフ 11

あなたは今後、移動体通信機器（携帯電話など）を持ちたいですか。以下の中から一つだけ選んで下さい。

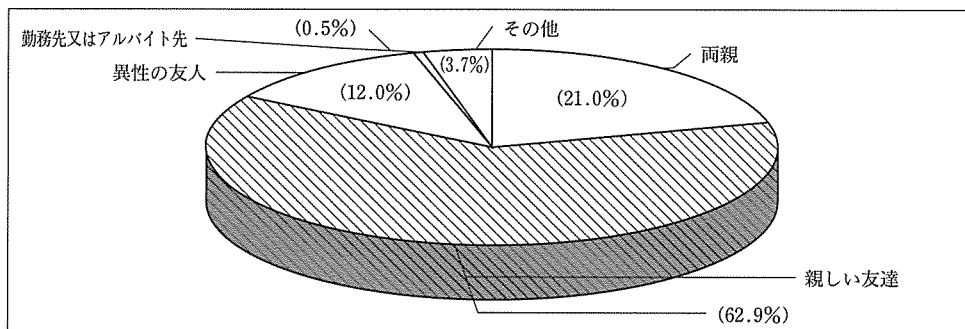
- ①社会人になったら持ちたい 194 人
- ②異性の友人が出来たら持ちたい 34 人
- ③友達が持つのなら持ちたい 26 人
- ④経済的な余裕があれば持ちたい 299 人
- ⑤持ちたくない 106 人



グラフ 12

あなたは、移動体通信機器の電話番号を、まず最初にだれに教えましたか。

①両親	272 人
②親しい友達	814 人
③異性の友人	155 人
④勤務先又はアルバイト先	6 人
⑤その他	48 人



4. モラトリウム世代の人間関係

それでは、今時のモラトリウム世代はどのような人間関係を持っているのでしょうか。人間関係の実態を明らかにすることは容易なことではない。ここでは、休日の過ごし方を軸にモラトリウム世代の人間関係を解明する。

「あなたは普段、休日をどのように過ごしていますか」という設問に対して、個人的な生活を重視していると理解できる「家でくつろぐ」39 歳あるいは「勉強する」1 歳と回答したものが 40 歳であった。

それに対し社会的であり、人間関係を重視した過ごし方と捉えることができる「街で友達と遊ぶ」と回答したものが 33 歳にのぼり、これに主に仲間と行っていると想像される「スポーツ」の 6 歳を加えると 39 歳であり、ほぼ同数であることが分かる (グラフ 13)。

それでは、このようないわば個人生活重視派と

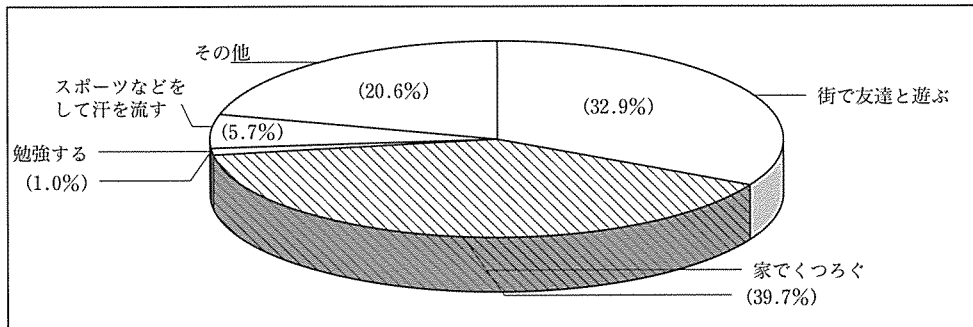
社会的、人間関係重視派とでは、どのような点で違いがあるのでしょうか。このような人間関係の相違に関する設問と必要不可欠のメディアに関する設問をクロスすると、興味深い結果が得られた (グラフ 14-1, 14-2)。テレビを不可欠のメディアと考えるものの比率がもっとも高いのが個人生活重視派とでも言うべき「家でくつろぐ」がもっとも高く、電話を不可欠のメディアと考えるものの比率がもっとも高かったのはもっとも社会的な人間関係重視派とでも言うべき「友達と遊ぶ」と回答したものであった。これをメディアの側から見ると「家でくつろぐ」と回答したものの比率がもっとも高いメディアはパソコンであり、次でゲーム、テレビ、ステレオの順になっており、もっとも低かったのが「電話」であった。以上のことから社会的で人間関係を重視する者たちと、電話を不可欠なメディアとする者とは高い相関関係であることが分かる。

このことは、日常的な電話の利用状況と人間関係との関係においても証明される (グラフ 15)。グラフ 15 は、「あなたは、一日にどのくらい電話を利

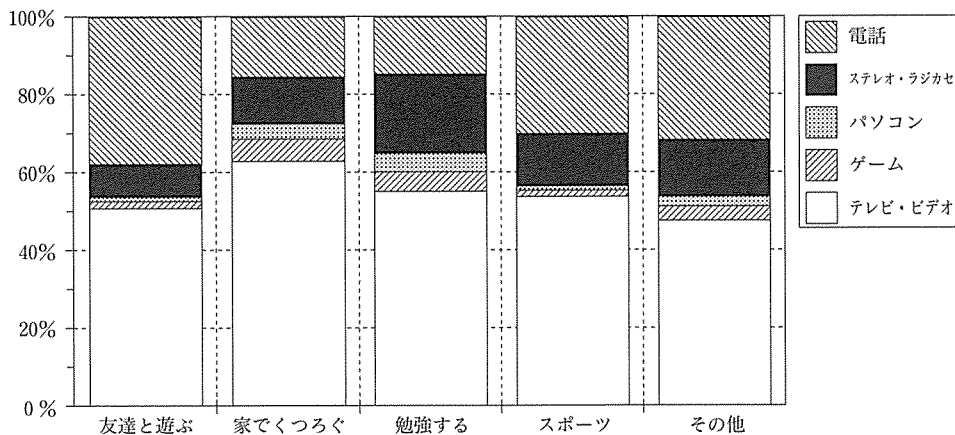
グラフ 13

あなたは普段、休日をどのように過ごしていますか。以下の中から一つだけ選んで下さい。

①街で友達と遊ぶ	638 人
②家でくつろぐ（読書、テレビ視聴、パソコン通信など）	770 人
③勉強する	20 人
④スポーツなどをして汗を流す	111 人
⑤その他	399 人



グラフ 14-1 人間関係と不可欠なメディア

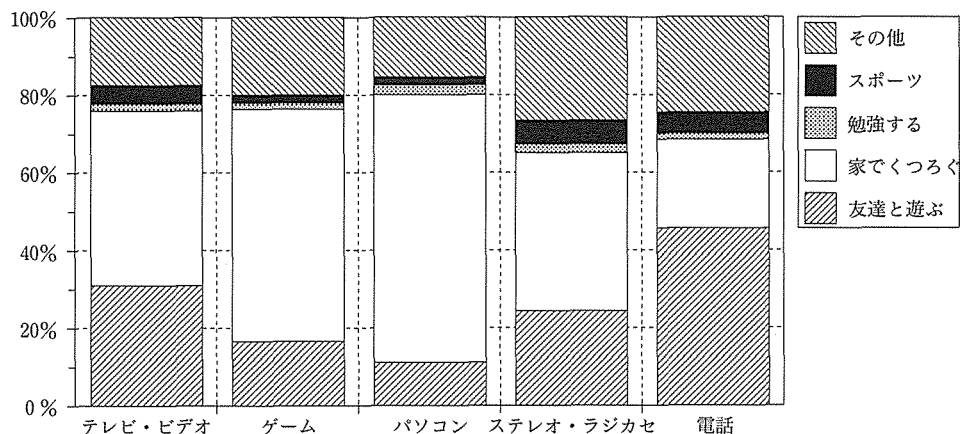


用しますか」という設問の回答と「あなたは普段、休日をどのように過ごしますか。」という設問の回答とをクロスさせたものである。電話を「ほとんど利用しない」と回答した者の比率がもっとも高いのが「家でくつろぐ」と回答した区分の者であり、逆に「30分～1時間」と「1時間～1時間半」と回答した者の比率がもっとも高かったのが、「友

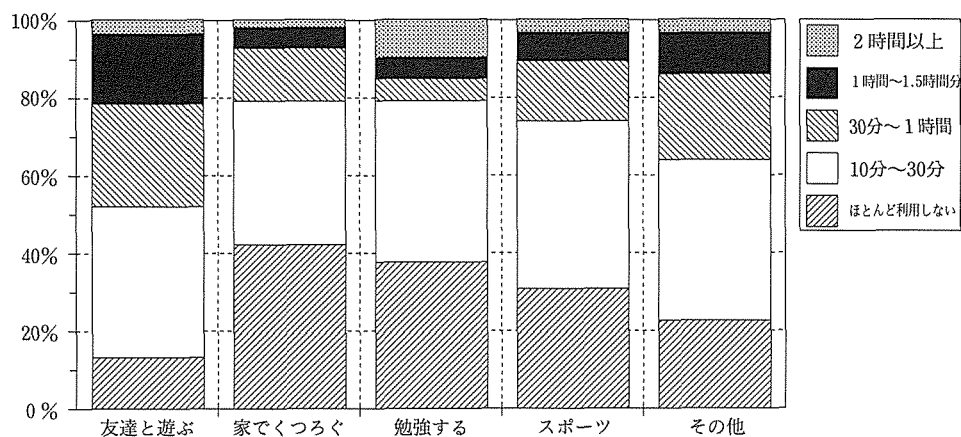
人と遊ぶ」と回答した者であり、全体的な傾向として「友人と遊ぶ」「スポーツをする」「勉強をする」「家でくつろぐ」の順番で電話を長時間利用していることが分かる。つまり、社交的な学生ほど電話を長時間利用しているのである。

それでは、人間関係と通信手段とではどのような関係があるのだろうか（グラフ 16）。グラフ 16

グラフ 14-2 不可欠なメディアと人間関係



グラフ 15 電話利用と人間関係

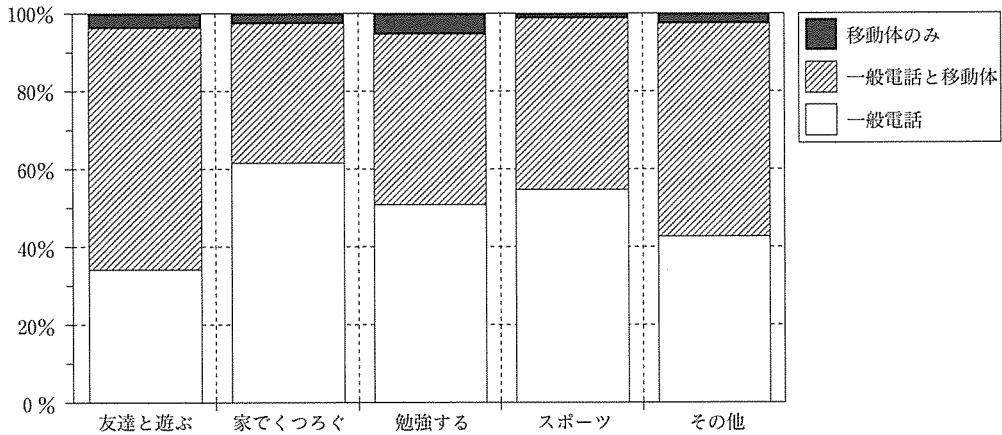


は、「あなたの通信手段は何ですか」という設問の回答と「あなたは普段、休日をどのように過ごしていますか」という設問に対する回答とをクロスさせたものである。移動体通信機器を利用しているものの比率がもっとも高いのは「友達と遊ぶ」と回答した者たちであり（約65％）、もっとも少なかったのが「家でくつろぐ」と回答した40％であった。このことから明らかに社会的で人間関係を重視する傾向にあるものが携帯電話などの移動体通信を利用していることが分かる。

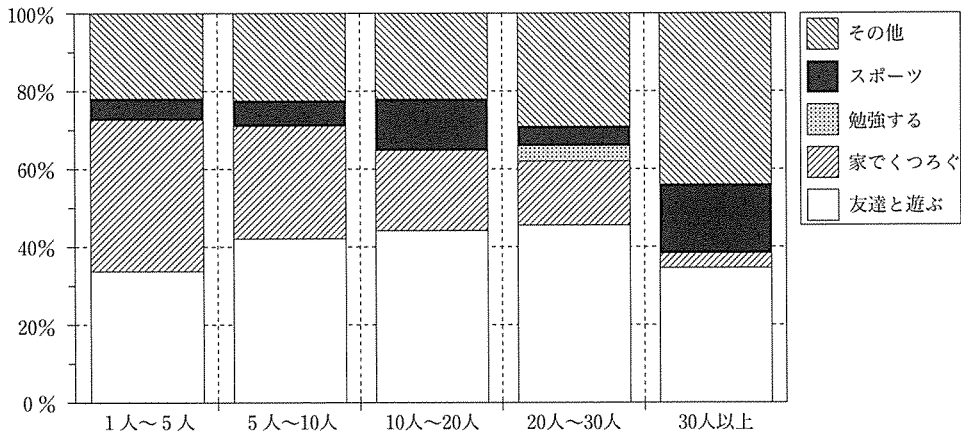
次に、移動体通信を持っているものの普段の友

達の人数と人間関係はどのような関係であろうか（グラフ17）。グラフ17は「あなたが普段連絡を取り合っている友達の数は何人ですか」という設問の回答と「あなたは普段、休日をどのように過ごしていますか」という設問に対する回答とをクロスさせたものである。これを見ると全体的傾向として人数が増えるにつれ「友達と遊ぶ」と回答したものが増加の傾向にあり、逆に「家でくつろぐ」と回答したものは減少の傾向にあると見ることができる。この回答から友人との関係の質を見ることができないが、少なくとも社会的で、友人関係

グラフ 16 通信手段と人間関係



グラフ 17 メディア連絡人数と人間関係



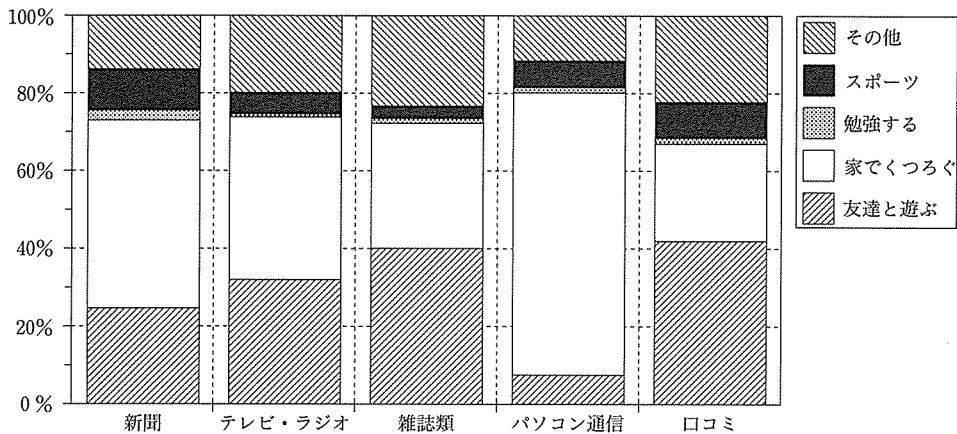
を重視する者が友人の数においても多いと言うことがいえよう。

では、情報源と人間関係とはどのような関係にあるのだろうか(グラフ 18)。グラフ 18 は「あなたは普段、主にどのような方法で情報を得ていますか」という日常的な情報入手の方法の回答と「あなたは普段、休日をどのように過ごしていますか」という設問への回答とをクロスさせたものである。これに見ると「家でくつろぐ」と回答したものの比率がもっとも高いのが、「パソコン通信」で

あり、逆に比率が低いのが「口コミ」、ついで「雑誌類」である。これと逆の相関関係にあるのが「友達と遊ぶ」と回答したものであり、比率がもっとも高いものが「口コミ」、ついで「雑誌類」であり、逆に比率が低いのが「パソコン通信」である。

情報源としてはテレビ、ラジオの比率が7割を越え、それ以外の回答数は、かなり限られたものであるが、社交的で、友人関係を重視する者は「口コミ」という友人関係による情報源を重視し、「家でくつろぐ」と回答したものでは、パソコン通信

グラフ 18 情報源と人間関係



というマニア的なものであった。情報源として比率がもっとも高いテレビ、ラジオは人間関係においてほぼ中間の位置づけられる。

5. メディア革命と青少年

以上、今時のモラトリウム世代をメディア環境に対する実態と人間関係の実態とを軸に見てきた。現代の若者をとらえて「青少年の無気力」と表現される。総務庁の「青少年の活力に関する調査」(1985年)においても「なにもしたくない」と回答した若者が67%にも上り、「一人きりでいるのが一番気が楽」と回答したものが56%にも上ったという。このようなことを取り上げて、「無気力世代」などといわれたりすることがある。

また、現代の若者を特徴づけて、自分の世界から外の世界に出ない「カプセル人間」と呼ばれたりすることがある。「カプセル人間」とは中野収と平野秀秋によって提出された概念であり、科学技術の発達による〈情報の環境化〉と〈環境の情報化〉を背景とした「情報環境」の出現を基盤とし、メディアとの間につくられた個々人の自閉的孤立空間(＝カプセル)が、無数に結びつきある種の

連帯空間を作り上げているというイメージに基づくものであり、孤立と連帯とを共存させた若者の実態を表す言葉として理解されてきた。そしてその〈カプセル〉は、情報を選択的に通過させるフィルターがあり、ある種の情報しか通過できない。さらにある種の情報はその装置で、意味変換されて通過するものである(注8)。

実際若者のメディアに対する依存度が高く、これに豊かな社会を背景とした「生活の私化(プライベート化)」が進んでいることが否定できない。

これは別の見方をすると若者の生活、文化の全般的領域に商品化・消費化が進行していると見るができる。若者の生活は、「生活の社会化」の中でいっそう個人化し、その文化はテレビを代表とするメディア文化の中に浸ったものであり、その中で個人の生活を享受しているのである。

中野はこの概念を発展させ、「メディア人間」と表現した。これには「電子メディア革命」の進展を背景に登場した人間であり、「仮想現実」とのコミュニケーションをなんの抵抗もなく自然に受け入れ、かつ享受する存在としてとらえられている(注9)。

このようなことは否定することができない。し

かしながら、このような中でも若者は他者との連帯、結びつき（＝コミュニケーション）を求めていることを見逃してはならない。このことは不可欠なメディアとして「電話」と回答したものが4分の1以上もあり、その利用のされ方も積極的に友人との結びつきの手段として利用され、コミュニケーションを楽しんでいることがうかがえる。さらに付け加えれば、そのようなコミュニケーション・メディアを不可欠のメディアと捉える若者は、日常的な人間関係においても深い関係を持っていることに注目しなければならない。つまり、それまで個人を狭いカプセルの中に閉じこめる傾向があったメディア自体がその発展により、再び人と人との結びつきを深める道具として登場し、時間と空間の壁を越えて、コミュニケーションする事を可能にしたのである。そしてまた、そのようなコミュニケーション・メディアを最初に積極的に利用しているのも若者であることを忘れてはならない。

1987 年
高橋勇悦・川崎賢一編『メディア革命と青年』恒星社厚生閣 1989 年
『現代のエスプリ』No. 265 藤竹暁編「若者は今」1989 年 8 月
中野収「若者像の変遷」『岩波講座 現代社会学 9 ライフコースの社会学』岩波書店 1996 年
高橋勇悦監修 川崎賢一・芳賀学・小川博司編『都市青年の意識と行動』——わかものたちの東京・神戸 90s 分析編
池谷壽夫・小池直人編著『時代批判としての若者』同時代社 1994 年
藤竹暁『メディアになった人間——情報と大衆現象の仕組み——』中央経済社 昭和 62 年（1987 年）
豊泉周治『アイデンティティの社会理論——転形期日本の若者たち』青木書店 1998 年
中野収『90 年代日本・ノート』東京書籍 1994 年
平野秀秋・中野収『コピー体験の文化——孤独な後裔』時事通信社 1975
中野収『メディア人間』勁草書房 1997 年
中野収『メディアと人間』有信堂 1991 年
川崎賢一「情報環境と現代青年文化」『社会学評論』No. 135 1983
吉成真由美『新人類の誕生』TBS ブリタニカ 1985 年
NHK 世論調査部（編）『日本の若者——その意識と行動』日本放送出版協会 1986 年

こめだ・きみのり／生活科学部助教授
e-mail: komeda@ss.sugiyama-u.ac.jp

- (注 1) 「東海ニューメディア懇談会」は「郵政省・東海電気通信管理局」におかれている。
(注 2) エリック・H・エリクソン「モラトリアムとアイデンティティ拡散」183 頁『現代のエスプリ』No. 78「アイデンティティ」1984 年 1 月
(注 3) 小此木啓吾「アイデンティティ論」同上 12 頁
(注 4) エリクソン 同上 185 頁
(注 5) 小此木啓吾「モラトリアム人間の時代」同上 204 頁
(注 6) 同上 205 頁
(注 7) 井上俊『遊びの社会学』世界思想社 1982 年参照。
(注 8) 平野秀秋・中野収『コピー体験の文化』時事通信社 1975 年
(注 9) 中野収『メディア人間——コミュニケーション革命の構造』勁草書房 1997 年

文 献

高橋勇悦編『青年そして都市・空間・情報』恒星社厚生閣
『現代のエスプリ』No. 78「アイデンティティ」1984 年 1 月号
『現代のエスプリ』No. 84「青年」1984 年 9 月号
高橋勇悦編『青年そして都市・空間・情報』恒星社厚生閣